

# ダニエル書 - 第百九十九号

政治的衰退と預言的運命——聖書の預言の文脈における民主党と共和党の終焉

Jeff Pippenger

2024-05-03

私たちは、地の獣の歴史における民主党と共和党の終焉を見極めている。黙示録13章の地の獣は、共和党と民主党に分かれ、共和主義の角の預言的歴史の中で争っている。角は権力の象徴であり、両方の角は、それぞれの預言的歴史の中に、両者の預言的関係の縮図を内包している。共和主義の角に関しては、その縮図は、アメリカ合衆国の歴史を貫いてきた二大政党によって示されている。アメリカ合衆国は、二つの勢力から成り立つと預言史の中で特定されているごく少数の王国の一つである。二つの勢力として描かれている聖書の預言における過去の諸国は、すべてアメリカ合衆国を予表している。メド・ペルシャ帝国、フランス（ソドムとエジプト）、そして北王国と南王国に分かれたイスラエルは、いずれもアメリカ合衆国の預言的特質に寄与している。

ダニエル書8章のメド・ペルシャ帝国は二本の角を持ち、後に生えた角（ペルシャ）のほうが高かった。私たちはこの要素を、民主党が共和党に先立って歴史に現れたという事実と結びつけてきた。したがって、共和党は最終的に二党のうち後者となる。最初の共和党大統領は、民主党の奴隷制擁護の立場に対抗して歴史に登場し、1863年に奴隷解放宣言を布告したが、それはアメリカ南北戦争のただ中であり、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会にとって反逆の年であった。

最後の共和党大統領は最初の共和党大統領によって象徴されており、そのため、最後の共和党大統領は、民主党の奴隷制推進派と彼の共和党の奴隷制反対派との内戦のただ中で歴史に登場することになる。終末期の民主党が推進している奴隷制は、地球規模の奴隷制である。最初の共和党大統領のときと同様に、最後の共和党大統領は奴隷制推進派によって暗殺されるだろう。盗まれた2020年の選挙において、トランプが政治的に暗殺されたのと同じように、1989年の終末の時以来の6人目の大統領として、トランプは最も裕福な大統領となり、米国だけでなく世界全体のグローバリストたちを刺激するだろう。したがって、2015年の大統領選出馬表明をもって、奴隷制推進派グローバリストが率いる民主党と奴隷制反対の共和党との間で、政治的内戦が開始された。

黙示録第11章の成就として、トランプは盗まれた2020年の選挙で政治的に抹殺され、民主党は街頭で歓喜した。だが2022年にトランプが再び大統領選に出馬することが明らかになると、黙示録第11章の成就どおりにグローバリストたちに大いなる恐れが臨み、彼らの闘争は激化した。メド・ペルシャの角の証しは、最後に現れる角（共和党）が最後に立ち上がり、より高く上がることを示している。最後の共和党の大統領は民主党に打ち勝つ

2024年の選挙は民主党の終わりを示している。なぜなら、日曜令が地の獣の預言的歴史を終わらせる前に、彼らが大統領候補を擁立する機会は二度とないからである。日曜令にお

いては、共和党もまた終わる。民主党は2024年の選挙で終わり、共和党は日曜令で終わる。聖書の預言における第六の王国の終わりである日曜令は、1798年の地の獣の始まりによって示されていた。地の獣の預言上の主要な特徴は、その「語ること」である。1798年、アメリカ合衆国は外国人・治安法を制定した。ゆえにそれは、アメリカ合衆国が竜のように語る時である日曜令を予表している。

1776年から1798年にかけて、アメリカ合衆国は、まだ聖書の預言における第六の王国ではなかったが、合衆国の発言に関する三つの道標を表している。その期間は、地の獣が聖書の預言における第六の王国として支配を開始することへとつながり、したがって、地の獣が第六の王国としての支配を終えることへと至る期間をも表している。1776年の独立宣言、1789年の憲法、1798年の外国人・治安法は、日曜法において地の獣が第六の王国としての支配を終えることへと至る歴史における三つの道標を表している。これら三つの道標の成就是、民主党と共和党の双方の歴史の中で異なる形で表されている。

2001年の愛国者法は、アメリカ合衆国の市民の独立の剥奪の始まりを示しており、アメリカ史の真の愛国者たちが独立宣言とともに行った布告によって象徴された。愛国者法という道標は、共和党と民主党の両党にとって三つの道標のうち最初のものである。

民主党は2024年の選挙で終焉を迎え、それは外国人・治安法によって予示されていたトランプの大統領令の到来をもたらすことになる。その後トランプが発令する大統領令は日曜法ではないが、「竜のように語る」一種のものである。というのも、それらは、終末に「積極的な専制」が起こるというシスター・ホワイトの指摘をトランプが成就する際に用いられるからである。専制とは独裁を指す語であり、その典型は外国人・治安法に見ることができる大統領令によって実現される。トランプが大統領令を施行すると、バイデンの失敗した大統領任期を特徴づけたペロシ裁判は逆転するだろう。

民主党と共和党の終わりを指し示す時期は、アルファとオメガの印を帯びている。というのも、各時期の始まりが終わりを表しているからである。このため、民主党にとっての第一の道標は2001年の愛国者法であり、第二の道標は2021年に始まったペロシ裁判である。これらの裁判は、1789年の憲法の完全な拒絶を表している。ペロシ裁判は、民主党の歩みの中における中間の道標を表しており、これは1776年から13年後、十三の植民地によって憲法が批准されたときに象徴されていた。ペロシ裁判は憲法に対する反逆を表し、その型は1789年に示されている。民主党の歩みの第三の道標は、彼らが政党として終焉を迎える地点である。

それらは2024年の選挙で終わり、2025年の就任式が行われると、外国人・治安法を典型とする大統領令によって第二弾のペロシ裁判がもたらされるだろう。したがって、民主党にとっての第三の道標は1798年の外国人・治安法である。民主党の終焉を表す時期は、選挙、就任、そして悪魔的な政治的ローフェアの導入から始まり、選挙、就任、そして悪魔的な政治的ローフェアの導入で終わる。

共和党にとっての第一の道標は2001年の愛国者法であり、これは1776年の独立宣言に象徴される。共和党にとっての第二の道標は、民主党にとっての第二の道標と同じではない。民主党では、1789年の合衆国憲法に代表される第二の道標は最初のペロシ裁判であったが、共和党では、同じく1789年の合衆国憲法に代表される第二の道標は外国人・治安法

であり、それは2025年にトランプの2度目の大統領就任が実現したときに成就する。1798年の外国人・治安法が、どのようにして1789年の合衆国憲法を表しうるのか？

トランプの2度目の就任式において、1798年の外国人・治安法に象徴される彼の大統領令は、第二の一連のペロシ裁判を開始するだけでなく、獣の像の形成も開始する。獣の像の形成の期間は、竜のように語ることから始まり、竜のように語ることで終わる。その期間の初めにおける語りは、独裁として表される君主的権力、すなわちシスター・ホワイトの言う「専制政治」の確立を表している。獣の像の形成の期間の終わりにおける竜のように語ることは、宗教勢力の権威が政治権力の上に確立されることを示している。

アメリカ独立宣言は、ヨーロッパの諸王の政治的権威とローマ教会の宗教的権威という双方の専制に対する宣言であった。獣の像の形成の時期とは、これら二つの腐敗した権力が結合され、その関係を宗教的権威が支配している時期である。形成、すなわちこの二つの権力の融合においては、最後に台頭し、より上位に立つのは宗教的権威である。したがって、その時期の始まりはその時期の終わりを表している。1798年の外国人・治安法は、民主党の終わりを表し、それは彼らにとって第三の道標であるが、同時に共和党の終末期における第二の道標をも表している。共和党にとっての第三の道標は、日曜遵守の強制である。

民主党にとって、1776、1789、1798によって示される三つの道標は、2001（1776）、2021年の第一次ペロシ裁判（1789）、そして2025年の第二次ペロシ裁判（1798）に相当する。

共和党にとって、1776年、1789年、1798年に代表される三つの道しるべは、それぞれ2001年（1776）、2025年の第二のペロシ裁判（1789）、そして日曜法（1798）に対応する。

1776年、1789年、1798年は二十二年を表しており、二十二年は神性と人性の結合の象徴である。これら三つの道しるべは「真理」を証ししている。というのも、最初と最後の道しるべが同じ真理を指し示していることを表しているからである。1776年は独立の確立を示し、1798年は独立の喪失を示す。したがって、それらは二十二文字から成るヘブライ文字の最初と最後の文字を表している。十三番目の文字は反逆の象徴であり、その三つの文字、すなわち最初、十三番目、最後を合わせると、ヘブライ語の「真理」という語を成す。

1776は2001年9月11日を表し、十四万四千人の封印の時期の始まりを示している。これは後の雨の降り注ぎの始まりを示しており、その時期には、共和党の獣の党によって民主党の竜の党が打ち負かされ、提供された働きへの見返りとして竜が獣に与えられる。

その歴史の中で、真のプロテスタントの角の封印は、主が再び御手を伸ばしてイスラエルの逐われた者とされている民を集め、彼らが日曜法において旗印として掲げられる、その期間に成し遂げられる。

2020年7月18日、真のプロテスタントの角は散らされ、2001年から22年後の2023年7月には、荒野で叫ぶ者の声によって第二の集めの働きが開始された。最初の集めは2001年に起こった。それは、ニューヨーク市の巨大な建造物が崩れ落ちる中で、黙示録第18章の天使が降臨した時であった。その天使の降臨は封印の時の始まりを表しており、2020年7月18日に大天使ミカエルが降臨したことは封印の時の終わりを表していた。アルファでありオ

メガであるイエスは、常に初めをもって終わりを示される。ゆえに、2001年9月11日に始まった最初の集めの預言的要素は、第二の集めで起こる預言的要素を表している。

第二の集結を明確に示す三つの例があり、それらは十四万四千人の封印の時の終結の歴史を表している。すなわち、キリストの歴史、1840年8月11日から1844年10月22日までの第一と第二の天使のメッセージの歴史、そして1844年10月22日から1863年の反逆に至るまでの第三天使の歴史である。これら三つの証人は、2023年7月から間もなく到来する日曜法に至るまでの十四万四千人の第二の集結を立証している。各歴史からそれぞれ一つの特有の要素を取り出してみると、第三の災いの役割の証拠が見いだされる。

1844年8月17日のエクセターのキャンプ集会の締めくくりに、真夜中の叫びのメッセージが宣言された。その宣言は、十四万四千人の歴史における真夜中の叫びの宣言を表しており、というのも、両方の歴史は過去においても現在においても、十人の乙女のたとえの成就だからである。ホワイト姉妹は、キリストのエルサレムへの凱旋入城が1844年の真夜中の叫びの宣言を表していたことを示している。キリストが動物に乗られたのはエルサレム入城の時だけであり、その時に乗られた動物はろばで、それはイスラムの象徴である。1844年から1863年までの第二の集結の期間において、1848年にホワイト姉妹は欧州諸国が怒らされていたことを指摘しており、その歴史における諸国の激昂は、イスラムによって欧州にもたらされた継続的な戦争の脅威によってもたらされた。第二の集結に関する三つの歴史それぞれにおいて、第三の災いにおけるイスラムの役割が示されている。

十四万四千人の封印の時は、2001年9月11日、第三の災いとしてのイスラムが現代の栄光の地であるアメリカ合衆国に奇襲攻撃を仕掛けたことによって始まった。二十二年後の2023年10月7日、第三の災いとしてのイスラムは古代の栄光の地に奇襲攻撃を加えた。やがて来る日曜法、すなわち黙示録11章の大地震の時に、第三の災いは再び突然到来し、再び現代の栄光の地に奇襲攻撃を行う。

メシアを十字架につけた者たちの象徴としての文字どおりのイスラエルによって表される反逆と、第三のわざわいにおけるイスラムによる三度の奇襲攻撃は、「真理」の刻印を帯びている。十四万四千人に封印を施すメッセージは、神の終わりの時の民を再び集める働きを成し遂げるものであり、そのメッセージが発せられるのは、第三のわざわいにおけるイスラムが活動している期間である。

「第二の集結」として表された預言的期間は、「第二の集結」の全歴史を構成する特定の預言的諸期間を明確に示している。復活後のキリストの降臨は、十字架で散らされた者たちを集める御業の始まりを画した。

そのときイエスは彼らに言われた。「あなたがたは皆、今夜、わたしのゆえにつまずくであろう。『わたしは羊飼いを打ち、群れの羊は散らされる』と書いてあるからである。」マタイ 26:31

墓の中での三日間の後、キリストは弟子たちのもとに降りて来られ、個人的な教えの四十日間を始められ、その後、ペンテコステにおける限りない聖霊の注ぎに先立って、一致と祈りの十日間が続いた。

テオフィロよ、わたしは前の書で、イエスが行いまた教え始められたすべてのことについて記した。すなわち、彼が選ばれた使徒たちに聖霊によって命じたのち、天に上げられたその日までのことである。彼はまた、受難の後、多くの確かな証拠によってご自分が生きておられることを彼らに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国に関する事柄を語られた。そして彼らとともに集まって、エルサレムを離れず、父の約束を待つように命じられた。それは前にわたしから聞いたことである、と言われた。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは幾日もたたないうちに聖霊によってバプテスマを受けるであろう。そこで彼らが一緒に集まったとき、彼に尋ねた、「主よ、今この時に、イスラエルに御国を再び回復してくださるのですか」。彼は彼らに言われた、「父がご自身の権威によってお定めになっている時や時期は、あなたがたの知るところではない。ただ、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受け、エルサレム、ユダヤ全土、サマリヤ、さらに地の果てにまで、わたしの証人となる」。こう言われたのち、彼らが見ている間に、彼は挙げられ、雲が彼らの目から彼を隠した。……五旬節の日が満ちたとき、彼らは皆、心をつにして一つ所にいた。すると突然、激しい突風のような響きが天から起こり、彼らが座っていた家いっぱい満ちた。使徒行伝 1:1-9、2:1、2。

四十日間——その後、弟子たちが父の約束を「待つ」べきであった十日間が続いたが——キリストはご自分の弟子たちを二度目に集めておられた。エルサレムでの待機の期間は、「遅れの時」の象徴であり、マタイ二十五章とハバクク書二章にある遅れの時と符合している。この全期間は、ヨハネがバプテスマを授けていたときのエリヤの働きから始まるとキリストによって示され、そして全期間はペンテコステにおける聖霊のバプテスマで終わった。バプテスマは死と埋葬と復活の象徴であるゆえ、全期間の中間の道標は十字架であった。というのも、この全期間は「真理」のしるしを帯びているからである。

この全期間は、聖霊が鳩の姿で下った、ヨハネによるキリストの洗礼から始まる。続いて、キリスト教の神殿の土台となるべき弟子たちを集める働きが始まった。その期間の終わりに、キリストは二度目に弟子たちを集め、第二の集めの期間は第一の集めの期間の繰り返しである。というのも、キリストは物事の終わりをその始まりによって示すからである。

十字架はキリストの洗礼によって予表されており、いずれの出来事も弟子を集める働きを始めた。始まりと終わりを指し示す道しるべは、死、埋葬、復活を表している。復活の後、荒野での四十日の試みは、彼が弟子たちのもとに下って来られた後の四十日の教えを表していた。これら二つの四十日は、イエスが「こう書いてある、『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる。』」と言われたところに示される根本的な真理を表している。

その期間に、イエスは弟子たちに、預言者たちがキリストについて証ししていたすべてのことを解き明かされ、こうしてその期間が主の預言のことばの開かれる時期であることを明らかにした。

さて、その同じ日に、彼らのうち二人が、エルサレムからおよそ六十スタディオン離れたエマオという村へ向かっていた。彼らは、起こったこれら一切の出来事について語り合っていた。彼らがともに語り、論じ合っていると、イエスご自身が近づいてき

て、彼らと一緒に歩まれた。だが、彼らの目は遮られていて、彼だとはわからなかった。…すると彼は彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち、預言者たちが語ったすべてのことを信じるのに心の鈍い者たちよ。キリストはこれらのことに苦しみ、そののちその栄光に入るべきではなかったのか。」そしてモーセから始めて、すべての預言者に至るまで、聖書のすべてのところでご自身に関することを彼らに説き明かされた。彼らが行こうとしていた村に近づくと、彼はなお先へ行くふりをされた。しかし彼らは、「私たちと一緒に泊まりください。夕方に近づき、日はすでに傾いていますから」と言って、しきりに引き止めた。それで彼は、彼らと共に泊まるために中へ入られた。彼らと共に食卓についたとき、彼はパンを取り、祝福して、裂き、彼らにお与えになった。すると彼らの目が開け、彼だとわかったが、彼は彼らの目の前から見えなくなった。ルカによる福音書 24章13-16節、26-31節。

キリストは、彼がどなたであるか分かっていなかった弟子たちとともにとどまり、彼らの目を開かれるまでそうしておられた。そして、「モーセとすべての預言者からはじめ、聖書全体にわたってご自身に関することを彼らに説き明かされた」。彼らが食べるための「パン」を与えられたとき、彼らの目は開かれた。四十日後、キリストは天に昇られ、四十日の教えの始めにエマオの弟子たちに対してなされたのと同じように、「彼らの目から見えなくなられた」。その後、彼らはペンテコステに備える十日間を始めたが、それはまもなく来る日曜法を予表している。

大地震、すなわち日曜法の時に、イスラムの第三の災いがただちに到来し、イスラムはイザヤの「荒い東風」、すなわち、十四万四千人への封印の期間に引き留められているヨハネの「四つの風」から来るエゼキエルの「息」である。

ひとたび十四万四千人に印が押されると、四つの風が解き放たれ、そして「突然、激しい突風が吹いてくるような響きが天から起こり、家中に満ちた」。第三のわざわいとしてのイスラム教は「突然」かつ不意に襲いかかり、第七のラッパである「天からの響き」をもたらす。それは神の奥義が成し遂げられる時を指し示す。そして、神性（聖霊の注ぎ）が人性と永続的に結合するとき、十四万四千人にとって神の奥義は成し遂げられる。そのとき主は突然ご自身の宮（弟子たちが集まっていた家）に来られ、十四万四千人と契約を結ばれる。

次回の記事でこの研究を続けます。

主は私たちが山に上り、いっそう直接に主の御前に出ることを望んでおられます。私たちは、世界の始め以来のどの時代にも増して、キリストの御名を告白するすべての者に全き献身が求められる危機に向かっています。

私たちの間に真の敬虔の復興が起こることこそ、私たちにとっての最大かつ最も緊急の必要である。私たちは神からの聖なる油注ぎ、聖霊のバプテスマを受けなければならない。というのも、それこそが聖なる真理を宣べ伝えるうえで実効的に働く唯一の力だからである。天的な事柄を悟りうるように、魂の生命力を失った諸能力に命を吹き込み、愛情を神と真理へと向けさせるのは、神の御霊である。

神の御言葉をそのまま受け取ることは、私たちの特権である。イエスが弟子たちのもとを去って天に昇ろうとしておられたとき、彼は彼らに、すべての国々、諸言語、諸

民族に福音を携えて行くように命じられた。彼はまた、上からの力を帯びるまではエルサレムにとどまるようにと言われた。これは彼らが成功するために不可欠であった。聖なる油注ぎが神のしもべたちの上に臨まなければならなかった。キリストの弟子としてははっきりと身を置き、使徒たちと共に伝道者として働いていた者は皆、エルサレムに集まった。彼らはあらゆる意見の相違を捨て去った。聖霊の約束の成就を受けるために、彼らは心をつにして祈りと嘆願を続けた。というのも、彼らは御霊の証しと神の力において福音を宣べ伝えなければならなかったからである。それはキリストに従う人々にとって非常な危険の時であった。彼らは狼の中にいる羊のようであったが、なお勇気づけられていた。キリストが死者の中からよみがえり、彼らにご自身を現し、世界に彼の福音を宣べ伝えるために彼らをふさわしくする特別な祝福を約束しておられたからである。彼らはその約束の成就を待ち望み、ひとときわ熱心に祈っていた。

これは、天の雲のうちに主の来臨を宣べ伝える働きにおいて役割を担う者たちが、まさに歩むべき道である。というのも、神の大いなる日に立つことのできる民を備えなければならぬからである。キリストは弟子たちに聖霊を受けるとの約束を与えておられたが、それによって祈りの必要が取り除かれたわけではなかった。彼らはなおさら熱心に祈り、心をつにして祈り続けた。今、主の来臨に備えて民を整えるという厳粛な働きに携わっている者たちも、また祈りに堅くとどまるべきである。初期の弟子たちは心をつにしていた。約束された祝福がどのように来るのかについて、彼らは推測もせず、珍奇な理論を唱えることもなかった。彼らは信仰と霊において一つであり、一致していた。

すべての疑いを払いのけなさい。恐れを退け、パウロがこう叫んだときの経験をあなたも得なさい。「私はキリストとともに十字架につけられた。それでも私は生きている。いや、生きているのはもはや私ではなく、キリストが私の内に生きておられるのだ。今、私が肉にあって生きているこのいのちは、私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった神の子を信じる信仰によって生きている。」〔ガラテヤ人への手紙 2章20節〕すべてをキリストに明け渡し、あなたのいのちがキリストとともに神のうちに隠されるようにしなさい。そうすれば、あなたは善をもたらず力となるでしょう。一人で千人を追い散らし、二人で一万人を退散させるでしょう。『ゴスペル・ワーカーズ』369-371.